

『日本アジア研究』第13号(2016年3月)

非入所のような、そうでないような ——あるハンセン病回復者のライフストーリー——

福岡安則*・菊池 結**

ハンセン病回復者、Aさん(本人が匿名を希望)とは、2015年1月12日「あおばの会(東日本退所者の会)」の新年会で知り合った。そのときのちょっとした会話では、「飼い犬を連れて多磨全生園に入所したいんだけど、犬はダメだと言われて困っている」とのことであった。聞き取りをお願いし、2015年2月16日、関東地方の某県にお住まいのご自宅を訪ねた。聞き手は、福岡安則、菊池結。同席者が「ハート相談センター」の内藤とし子。聞き取りのあいだじゅう、Aの全生園入所の阻害要因となっている愛犬のダックスフントが、わたしたちにじゃれついていた。

聞き取りの場でのAの第一声は、「わたしは、全生園には入ってないんです。入院だけ。『そんなところ入るんだったら、おれ、死んでしまう』って言ったら、『いま、いい薬ができたから、ちゃんと約束を守ってきちんと薬を服用するんならば、療養所に入らなくていい』って、東大病院の先生に言われた。そして、うんと悪いときだけ全生園に入院してたんですよ」というものであった。Aによれば“入所”ではなく“入院”だから、園内の寮舎に自分の部屋をあてがわれることはなかったし、病棟での治療がすめば速やかに娑婆に戻り、東大での通院治療を続けたというのだ。

Aの戸籍上の生年は1934(昭和9)年1月。2015年の聞き取り時点で81歳の男性。京都府北部の山村の貧しい農家に生まれ育つ。13歳で大工の住込み小僧となる。東京へ出てきて大工をしている22歳のときにハンセン病を発症。近くの病院で診察を受けるが、2ヵ月後、東大病院へ送られる。そこで東大の医師とのあいだで、上述のやりとりがあり、1956年の時点で「ハンセン病の通院治療」を受ける身となった。——そしていまでは「退所者給与金」をもらっている。

この「非入所のような、そうでないような」の語り手、Aと対照的な体験をしたのは、「『1日おきに薬を取りに来い』では勤めが続かず」(本誌第12号)の語り手、稲葉正彦(園名)であろう。稲葉は1934年生まれで、Aと同じ年である。稲葉が菊池恵楓園に收容されたのは1965年であり、Aが東大病院に通院を始めたのが1956年だから、9年も後のことである。かたや、阪大で「1日おきに薬を取りに来い」と言われて、勤めの継続の断念、

* ふくおか・やすのり、埼玉大学名誉教授、社会学

** きくち・ゆい、大正大学・淑徳大学研究員、宗教学

本稿は「JSPS 科研費 25285145」の助成を受けた研究成果の一部である。

なお、語りの表記において、亀甲カッコ〔 〕は、聞き手による補筆。また、8ポの()書きは、一般的に読み仮名を記しているほか、たとえば、「全生園(あすこ)」という表記は、語り手が「あすこ」と発話し、聞き手が「全生園」という意味で受け取ったということを示す。

療養所収容，離婚，終生の療養所暮らしに追い込まれたのにたいして，かたや，それより早く9年も前に東大で「1週間に一度，薬を取りに來い」と言われ，ハンセン病関連の外科治療を要するときに「全生園に入院」しただけの「通院治療」を全うし，娑婆での大工職人としての仕事を最後までやり遂げ，「内縁」関係の妻とも添い遂げた。——Aの事例は，「らい予防法」による「強制隔離政策」の過誤をあますところなく実証している実例であろう。

わたしは，稲葉正彦の聞き取り事例だけを見ていたときには，彼に対する阪大の医師の対応は時代的制約ゆえのやむをえざる儀と判断していた。だが，Aの語りと突き合わせるとき，必ずしもそうは言えまい。9年も前に大工仕事を継続しながらの通院治療を認めた医師がいたのだ。医師「個人の資質」の違いが，きわめて大きい。同時に，そのような個人的資質が発動しうる環境いかんは，個々の医師が属する「教室・医局の意識構造」の問題でもあったであろう。

それにしても，Aは幸運だった。しかしそのAにして，「らい予防法」にもとづく「強制隔離政策」「無らい県運動」が張り巡らしていた，いわば“蜘蛛の巣”から自由であったか／あるかという点，残念ながら「否」である。ひとつには，ハンセン病に罹った者は子どもをつくってはならないと思いついでいて，内縁関係の女性が妊娠したにもかかわらず，「泣く泣く」墮胎してしまったことを，いま悔やんでいる。また，年齢を重ね身体が不自由になり，自分で自分のことができなくなったとき，ハンセン病の病歴が周囲の人にバレることへの，限りない恐怖に囚われている。

キーワード：ハンセン病，通院治療，ライフストーリー

全生園には「入院」しただけ

わたしは，全生園（ぜんせいえん）には入っていないんです。入院だけ。もう，「そんなところ入るんだったら，おれ，死んじゃう」って言ったら，「いま，いい薬が，[もともとは]結核のための薬だけけど，できたから。だから，ほんとうに，ちゃんと約束を守るんならば，[療養所に入らなくて]いい」って。東大[病院]の先生に[言われた]。そして，うんと悪いときだけ[全生園に]入院してたんですよ。[寮舎のほうに部屋をもらわなかった。病棟のベッドにいただけ。]ちょうど，成田[稔]先生が全生園（あすこ）へ，若いバリバリの先生[として]みえたっていう，そういう時代です。

故郷は「高浜原発」から30キロ圏内

[わたしの生年月日は]いちおう[戸籍上は，昭和]9年の1月23日になってるけど，ほんとは[昭和8年の]11月。けっきょく，雪が多かったから，役場へ届けるのが遅れた[そう]だ。[故郷は]京都府です。

思い出の記憶っていうと，まあ，わたしとこあたりは貧乏で子沢山だから，おふくろがいつも苦労してたつうのは，じっと見てましたね。[きょうだい]5人です。わたし，3番目。[うちは農家でした。]わたしのほうは，まるっきり田舎ですから。京都府何鹿郡（いかるがぐん）……。丹波の大江山に近いほう。[冬は雪が]深いんです。——わたしは，ゴムの長靴と運動靴を履いたことないんです。けっきょく，戦争中ですから，学校へ，何足（なんぞく）って[物資が

割り当てで] 来ても、いつもくじ引きに当たったことはない。ふんだから、運動靴も履いたことはありません。だから、藁(わら)の雪沓(ゆきぐつ)。[真冬は雪が] サラサラだからいいんですけど。あつたかくなって、道路の雪が溶けると、[滲みてきて] もう冷たくて、冷たくて。雪焼けなんかしょっちゅうよ。

[学校には] 行かなんだり、行かなんだり。だって、田植えが始まると〔下の子を〕子守りしなきゃなんない。——わたしは、親のところには、12歳までしかいません。13歳から住み込みで、小僧に行きましたから。いまの、大飯(おおい)ちゅうとこ。高浜原発のとこ。きのうも地図を見てたら、フクシマみたいに爆発したら、わたし〔のいたところ〕は4キロから5キロの〔地点〕、直線。でも、福島のはとはずいぶん苦勞なさってるから、こういうことは言っていないかわかんけど、わたしとこあたりは、関電〔から〕も国からも一銭もカネももらってないけど、県境で若狭の国は、カネ使うのに苦勞してんだから。使い切らなかつたら、来年はカネが減らされるから、なんがなんでも使い切れえ、ちゅって苦勞してんだから。若狭湾は「原発銀座」と言われるぐらい〔原発が〕多い。何十つある。それはねえ、はっきりしたもんですよ、京都府と福井県で県境で、わたしとこのほうは砂利道、むこうは完全舗装の、もうこれ以上手をかけようがないような立派な道路。それでもし、フクシマみたいなことが起きたら、わたしとこは一銭もカネももらわないで、それとおんなじ苦勞しなきゃならない。こんどのフクシマがあつて、避難道路がどうかこうとかつてゆつてたでしょう。わたしとこは、そんなことで一銭のカネも出なけりゃなんもでない。〔カネが落ちるのは〕福井県ばっかしや。こんども、原子力委員会で〔原発の再稼働〕オッケー出たでしょ。福井県には「同意を求める」けど、30キロ圏〔内でも〕わたしたちのとこへは「説明するだけだ」って、こう言うんだからね。

大工の奉公は「奴隷」並み

[13で奉公に出たのは] 大工。〔いま〕81。それから12引けば——まあ、いまは大工やってないけど——〔ずっと大工を〕やってたということだ。

[元気そうですね、だって?] いやあ、元気じゃない。やっぱり、神経の麻痺(あれ)で足が悪くて、まいっちゃう。〔感覚の〕悪いところは、釘踏んだりしても気がつかない。寒い、寒いって、足の裏〔ストーブに〕くっつけてると、神経あれだから、火傷〔しても気づかない〕。よくみると、もう、足がグチャグチャになってる。知覚麻痺してるとこが、どうしても怪我しやすい。だから、わたしは、足でなしに、股(こ)で車を運転してる。ずっと、トラックの運転してたから。あの、いまはノークラだけど、ギアですから、昔のやつは。感覚を、股(こ)で取る。足の先でなしに。それはもう、自然と覚えちゃう、何十年もやってると。おかげで、人身事故は1回も起こしてない。〔おまわりに切符を切られたのは〕銀座とかあつちのほうのビルの中の内装工事やると、朝早く行って、トラック停めて、材料をあれして下りてくると、「駐車違反」貼つてある。

わたしはいま、それも建設現場で怪我して、東京医科歯科大学の整形外科の先生に、左足に金属棒(かね)入れられて、それでもってるの。「これはもう、はずせないよ」って。右足も悪いんだけど、金属棒(かね)が入ってるのは左足。もう、グシャグシャ。複雑骨折だったから。足場から落ちたところに、ち

ようどコンクリートの角に、ここをバーンとぶつけちゃった。もう、50 すぎ
てから。〔親方になってても、そういう高い所の〕仕事やりますよ、根が大工
だから。東大出の一級建築士さんは、こうやって〔地上にいて上を向いている
けど〕。

〔大工の奉公に行ったのは、小学校を卒業してからか、だって？〕戦争中は
国民学校になった。〔当時のわたしは〕軍国少年ですよ。だって、教育がそ
うだもの。世間一般がそうだもの。学校で教育を受けなきゃ「天皇陛下万歳」
って言うわけないから。——終戦のときは、天皇陛下から、なんかお話がある
んで、ムラで1台しかラジオがないんですね、「そこへみんな集まってくださ
い」って。そしたら、「日本は負けた」って言われた。〔日本が負けて〕悲しい
っちゃう〔よりも〕、そのころは貧乏だから、食わなんなり食わなんなりだか
ら、腹一杯食べれば、それで幸せだった。

〔わたしは〕国民学校高等科へは行ってないわけだ。〔それまでも〕学校へ行
かなんたり行かなんたりだから、卒業もクソもないわけだ。それは、学校へち
ゃん行ったひとの話ですよ。

小僧に行ったって、どうせろくに仕事できないから、材料運んだり、子守り
したり。それで、〔食べるものが〕ないころだから、おかみさんが少しの田圃
と畑やってたから〔その手伝い〕。田舎のほうはみなトイレ、外にあるから、
あすこ行って、掻き回して、桶へ、こう〔糞尿を〕半分ぐらい入れて、〔前後
に〕2つ、担いでいって、野菜にかけて。で、秋になると、山田（やまだ）だか
ら、猪が出る。夕方、飯食うと、藁で、こう編んだ屋根をはって、〔そこへ〕
糞殻を持っていって〔火を点して〕。火が消えないように〔見張り番をして〕。
火をみると、猪が出ないから。そういう生活。

〔大工の仕事を仕込まれたのは〕いつからいうような、そんな区切（きげん）
はありません。自分の意志しだい。手にとって教えるなんてことは、絶対ない。
——〔親方は〕きつかったもなにも、奴隷よりひどいめに遭った。だいたい、
朝5時から5時半に起きたら、作業場へ行って、道具とか材料（あれ）とか、「き
ょうは、これとこれが要る」って言われたものを、ちゃんと〔揃える〕。〔運ん
で行くのは〕大八車なんだけど、終戦のときだから、戦闘機のこんな丸いゴム
のタイヤがいっぱいあったから〔助かった〕。昔の大八車だと、檜（かし）のあ
れに鉄の輪っかが入ってるあれでしょう。それでなしに、ゴムだから、まだよ
かったんだけど。それに積んで〔現場まで〕行って。それで、掃除したり言わ
れたことをする。おかみさんの用事があれば、畑やったりあれしたり、そうい
うことをさせられる。ともかく、わたしは小僧に行って、1円なんて大きなカ
ネじゃない、1銭ももらったことない。〔給金を〕前借り〔でもらっていたわ
け〕じゃありません。盆暮れのアレつって、お盆にはステテコとシャツ、お正
月には毛のついたネルの〔下着の〕上下（うえした）、それだけ。あと、大工だ
から、田舎は建前があると、建主（たてぬし）さんから職人みんなに御祝儀をい
ただく。それだけは親方、手えつけられないわけですよ。だいたいね、わたし
のほうは、上棟式（じょうとうしき）まで3日はかかるんですよ。そうすると、
だいたい3日分ぐらいのあれを、一人前の職人の手間（てま）で包んでくれる。
まあ、祝儀だからお客の気持ち次第だから、多いときも少ないときもあります
けど。

〔逃げ出そうとは思わなかったか、だって？〕いや、何度も思ったけど。逃

げ出したら、おふくろがどんなに困るだろうなど。それでなかったら、もっとグレてますよ。

〔そこには〕18まで〔いました〕。18までで、我慢しきれなくて。ほんとは〔年季〕20歳（はたち）までなんだけど、抜け出しちゃった。もう、そのときはおふくろも「よう辛抱した」って言ってくれた。もう、見てるから、知ってるから。〔実家からは〕2里ぐらい。だから、人の出入りもあるから、わたしがどういう生活してるかいうことは、ひとの噂で聞いているわけ。休みだって、長いときは半年ぐらい1日も休みなかったでしょ。その当時、わたしたちは朝5時から夜9時まで働いてるわけですよ。それでも、なんも言わないで働いてきた。〔そのころは〕病気がらしい病気はなかったねえ。1回だけ、首（こ）がものすごく腫れて、見かねたのか、病院へ連れていってくれたんですよ。それをもう、恩に着せて、恩に着せて。「もう、役立たずが。こんなあれで〔病院へ〕行って」とかって、サンザン言われたのは、あれは堪（こた）えたね。

東京へ出てきたところで発病

〔親方のところをやめたあと〕田舎でね、すこし、やってたんだ。まだそのころは、大工いえば、木造で家を建てるのが普通（あれ）だったけど、型枠工事が始まった。そういう方面をやってみたいと思って、大手のゼネコンの仕事に行ったけど、やっぱり、そこも、むかしの封建時代のあれだから、「金〔が大事〕か命〔が大事〕か」っていうようなことを言われたこともある。勘定日に、カネくんない、ちゅうこと。そのかわり、飯場ちゅうて、親方の奥さんが女のひとを使って御飯炊いて。で、「煙草がほしい」「作業着がほしい」つえば、それは「いいよお」つって出してくれる。そのかわり、精算日に清算してくれないちゅうこと。だからね、よそへ行けないわけ。飼い殺しになっちゃう。そういうとこをずいぶん歩いた。それで、田舎であれしてたんだけど、池袋で生まれた男で、わたしより2つぐらい上だったかな。それが、予科練で死にぞこなって帰ってきたのが、仕事がないから大工やるいうて、まあ、知り合いになって。〔東京は〕焼け野原で、お父さんもお母さんも、身内〔の生死〕はわかんないつう。お母さんが舞鶴の出身だったから、それで舞鶴へ来て働いていた。それが、どうしても池袋、生まれたところへ行きたいちゅうから、「じゃ、おれも一緒に行くよ」つって付いて来て。それがいままで、ずっと東京にいるわけ。〔東京へ出てきたのが〕いつだったかなあ。20歳（はたち）か21ぐらいじゃないかな。さだかでない。で、わたしたち、東京へ来て、役場から「外食券」いうのもらわないと、飯食えなかった。「外食券食堂」つってあって、食券がないと飯食べられない時代。わたしたちのころは、裁判所の裁判官が「法律守る人間が闇屋はいけない」つって、栄養失調で死んだひとがいる時代。

〔病気に自分で気がついたのは〕東京へ来てから。22ぐらいだったんじゃないかな。それで、新宿の、日本医科大学、あそこで晒者（さらしもの）にされちゃった。——わたしは、ちょうど、あその病院のすぐ近くにアパート借りてた。「淀橋病院」つって、そのころ言ったんだけどな。だから、新宿には、新宿警察はなかったの。あその近くに、警察署があるけど、あれは「淀橋警察」つっていった。最近「新宿警察」なんて言ってるみたいだけど。

〔「淀橋病院」の先生は〕薬はなんにもくれないで、「いついつ来なさい」「いついつ来なさい」つって、行くと、若い先生がいっぱいいて、おかしいなあ

思って。けっきょく、ハンセン病はこうだって教えるために、2ヵ月ぐらい引っ張られちゃった。そんな長いこと引っ張らないで、すぐ東大へ送ってくれていれば、早くに薬をもらえてたんだ。

〔その先生は知覚麻痺の検査をしたか、だって?〕いや、その先生はもう、診ただけでわかったみたい。〔わたしは〕おもに〔上半身に〕斑紋があった。それに神経が、痒いのに搔いても搔いてもあれだし。近くに病院があるんだから、一回診てもらったほうがいいなあと〔思っ、行ったんだけど〕。

それで、さんざん晒者(あれ)して、用なしになったら、「当病院では処置できないから、紹介状(これ)を持って東大へ行きなさい」って。〔東大では〕「全生園へ入る準備をきなさい」と。「あんたも、すぐ行くことはできないだろうから、3日間、時間あげます。そのあいだに、ちゃんとアパートの整理とか、そういうのをきなさい」と。

〔そのとき、医者が病名を告げたか、だって?〕「ハンセン病だ」って。〔いや〕「らい病」。〔言われて〕わかりました。そういうことは、いくら馬鹿でも多少は知ってるから。忌み嫌われる病気だと。キリスト教の『聖書』のなかになんか出てくるぐらいだから。——〔小学校もまともに行っていないひとが、『聖書』をいつ読んだのか、だって?〕いや、それは、病気になってから、自分の悩みを悩んで、新宿の紀伊國屋書店で、哲学とか宗教(あれ)とかいうコーナー(ところ)へ行ったら、『幸福論』という本があって、それ〔手に〕取ったら、たまたまヒルティ先生の『幸福論』だった。ヒルティ先生は、無教会派。だから、立派な教会(やしろ)を建てるんだったら、自分の心に建てなさいって。「この戦争は負けるからやめろ」言ったために刑務所に入れられた東大の矢内原忠雄先生も『幸福論』出してらっしゃるから、あの本もわたし買ってます。わたしの田舎だと、大本教の出口王仁三郎(でぐちわにさぶろう)、あれも戦争負けるからって〔言っ、〕終戦になるまで刑務所へ入れられてた。〔そういう人の本を〕ただ、すがるような気持ちで一生涯懸命読んだ。

〔家族にも自分が生まれ育ったムラにも、ハンセン病の患者は〕1人もいない。だから、よけい、わたし、田舎に気い遣っちゃった。わたしがそんな病気だとなったら、おふくろ、どんなに悲しむだろうと。それに、小さな村だから、村のおつきあいから、就職から、結婚から、きょうだいみんなもう、わかってるから、だからもう、黙って〔なににも〕言わなかった。幸い、東京にいたから。わたしが田舎へ帰らないかぎり、わかんない。

〔東大の先生が〕もし悪い先生だったら、あそこだったら、強制〔収容〕をかけられたんだ。〔ハンセン病療養所には入所したくないという〕わたしの言うことを聞いてくださったから。いやあ、わたしの人生も強制かけられてたら、また、違ったものに……。最初はね、「1週間〔分〕薬やる。1週間〔ごとに〕ちゃんと来れますか?」って言われた。ちゃんと、それ、仕事休んでね、薬をもらいに行った。そのうち、先生が、インドのほうへ行かなきゃなんないとか、ビルマへ行くとかいって、「しばらく帰ってこないから、それじゃ、3ヵ月分、調剤するからね」って。だんだん信用できてから、そうしてくれた。〔その先生の名前?〕忘れちゃった¹。

¹ ハンセン病関係で東大で名前が知られている医師というと、『日本らい史』(1993, 東京大学出版会)を書いた山本俊一(2008年, 86歳で没)であろう。しかし、公衆

全生園へ「入所」ではなく「入院」

わたしが怪我して足が悪かったりしたときに、「[あんたは] ハンセン病で、一般の病院では診てもらえない。だから、あんたのためだから、全生園へ入院しなさい」と。「あんたのためだ」と言われたから、覚悟決めて、入った。[全生園に入院したのがいつだったかは] もう、忘れた。[それまでに、東大病院には] だいぶ長く行ってました。[東大での治療は] 最初はプロミン。[注射を打ちました。]

[全生園へは「入院」ってかたちで行ったから、寮舎に自分の部屋は] もらってません。[病棟で] 大勢一緒でした。[病室のベッドにいたっていうことです。]

でも、[全生園で] わたしなんか入院したところは、木造のあれで、いまみたいなあんな立派なものじゃない。ひどかったですよ。風呂だって、大きな木の風呂で、みんな一緒に入った。それで、みんな、縋帯してね。わたし、記憶に残ってるのは、入院してる若い方が亡くなって、わたしの想像だけど、お父さんお母さんじゃないかな、なんか、陰でヒソヒソヒソヒソ話してらして。おそらく、亡くなっても、家でまともに葬式は出してもらえないんだろうなあなんて、わたし思った記憶がまだ残ってます。で、あそこでね、看護婦さんで中村さんていったと思うんだ、あの方がずいぶんよくしていただいた。

このあいだ[全生園へ行って] あれしてみたときには、あそこの病院にお世話になってたカルテはあるみたい。わたし、「ちょっとこういう状態で、辛いんですけど」つったら、いまの先生が「カルテ持ってこい」なんて、昔の古いカルテ見てらしたから。でも、それがあったから、いま、月々いくらかか退所者給与金(おかね)もらってる。

家内とは内縁関係のままで

[全生園に入院したのは、足の] 裏傷が化膿しちゃって、どうしようもなくなつて。東大の先生から[ハンセン病の] 薬はもらってるから、[全生園では] それとは別に、外科だけの処置していただいた。[全生園への入院は、長いときで] 2ヵ月ぐらいじゃないかな。1回じゃないけど。

わたしは、だから、そのころは、彼女と一緒に[暮らして] いたもんですから。結婚はしてないんだけど。それで、[病気のことは] いっさい言っていなかったんだけど、入院するのに場所を言わないわけにいかないから、だから、家内が1回だけ全生園に見舞いにきた。あそこの小柄な婦長さんが「Mさん、どうしたの？」って言うから、「いや、家内が来ると思うんだけど」なんて言ったら、「まかしときなさい。みえたら、わたしがよく話(はなし)しますから」つって言ってくださって。それで、来るのは来たんだけど、おかげで、病気の

衛生学が専門なので、臨床治療をしていたとは考えにくい。ハンセン病専門医の和泉眞蔵先生に経緯を述べ、教を乞うたところ、「木下李太郎の筆名で詩人・劇作家としても著名な太田正雄ではないか」と言う。太田正雄は、1926年に東北大学医学部教授になって以降、また、1937年に東京帝国大学医学部教授になって以降も、ハンセン病の臨床治療に従事している。しかしながら、1885年生まれ、1945年10月15日に死去している。Aが東大に通院した時期とは時代が合わない。けっきょく現時点では、Aの「通院治療」を認めた東大皮膚科の医師の名前は不詳である。

ことは家内はいつさい言わなかった。家内には2人、子どもがいたから。わたしが育ててない。大阪で子どもたちは生活(あれ)してたけど。まあ、[子どもたちが]遊びに来てても、わたしがそういう病気だからって、差別するようなことはいつさいなかった。——彼女は、2人子どもを連れて、旦那と別れて、その後わたしと暮らしたわけだ。内縁ですね。彼女には子どもとか親戚あるのに、わたしがそういう病気で、もしばれたとき、彼女にたいへんな迷惑かけるから、わたしも、そんなことにはこだわらなかった。一緒にいてくれるだけで、ね。

それで、わたしより勉強たくさんしてて頭もいいから、一生懸命、銀行関係とかみんな[やってくれた]。それで、まがりなりにも、まあ、4,5人、職人を使って、一軒の家(うち)を請け負うような[工務店を経営できたわけ]。あの、わたしの世話になってた会社が倒産したんですよ。建築部門が悪いんじゃないけど、6つぐらい系列会社があって、親会社は材木[商]だったんだけど、それがちょっと山を買いすぎて、ちょうど第一次石油ショックのころ、会社がダメになって……。[そういうときでも、家内の助けもあって、なんとかやってこれた。][家内は]祇園育ち[だったから]三味線とかああいうのが達者[でした]。

[東大病院には]だいぶ通った。10年ちかく行ったかもしれない。「もう、いい」つって言われて[行かなくなった]。そのころには無菌になってたんじゃないかな。[それが]いつごろだか、記憶がはっきりしない。さだかでない。けっきょくはもう、どっか悪いと、その東大の先生を頼りにしてたから。[ハンセン病であろうと]なかろうと。[ようするに、わたしの]主治医ですね。[それが東大にも行かなくなって、ハンセン病とは]縁が切れてました。

予防法廃止と裁判勝訴の報にふれて

[それが、平成8年に]隔離の法律(あれ)がなくなりましたでしょ。それは新聞で見ました。やっつと、ここまできたかと思ったけど。でも、ひとの気持ちは一朝一夕(いっしょういちじゅう)に変わるものじゃないから。

[とにかく、わたしの病気のことを知ってる人は誰も]いない。[誰にも知られないようにしてきた。]家内は、ほら、全生園に見舞いに来たから[わかっている]。でも、病気のことでわたしを責めたことは一度もありません。家内も、ずいぶん何回も手術して、ペースメーカーを入れたりしてね。なんとしてもよくなってほしいと思って、わたしも蓄えもしてたりしたんだけど、みんな使いましたよ。やっぱり、家内が半分、事務関係背負(しょ)ってくれてたから[やってこれた]。いまだったら、ほら、携帯があるけど、そのころは携帯ないから。[わたし一人であれば]家を留守にして、現場出れば、お客さん連絡しても誰も出る人いないしね。

[家内が亡くなって]もう何年になるのかなあ。神戸の大震災のときにはまだ生きてたんだから。わたしの姉が神戸にいましたから。それと、いちばん下の妹が宝塚でやっぱり[震災に]遭ってるからね。

[家内が亡くなってからだけど、当時は東京の高円寺に住んで]知り合いの方が「日本の大学へ行くんで来てるんだけど、金がないから高いアパート借りられないから、おまえさんとこ、部屋空いてるんだから置いてやってくんないか」って。[その人は]ネパール人で、大学院も出てます。それで貿易会社

へ勤めたんですけど、日本から輸出を主にする会社だったから、円高で会社がダメになって。それから、練馬でレストランをやったけど、うまくいかなくなつて。〔日本語はちゃんと〕通じます。子どもも日本で生まれてる。

〔高円寺の家は〕自分のうちじゃないんだけど、一軒まるまる借りてた。ほら、わたしは仕事で帰ってくるの遅いし、自分で好きなように、友達来ようがなにしようが〔いいよ〕。高円寺は便がいいから、自然に集まってくるんだよね。10カ国ぐらいの人（子ども）、来てたんだ。オーストラリア人だ、カナダ人だ、ロシア人だつて。〔そのネパール人は〕いまも〔ここに〕来ます。来るともう、家中、きれえに掃除していく。来たいときに来て、好きなだけいて、帰っていく。ここは、道路からも少し入ってるし、日当たりもまあまあいいから。前は、この前のマンション、ぜんぶ山だったんです。一面に木が〔生えていた〕。

〔わたしもね〕独りでぼおつとしてるよりね。それにほら、ガイジンだと面白いから。どんなだろう、と思っちゃう。だから、ここもね、「置いてやってくれえ」つうんで、しばらくいたんだけど。真っ黒なんですよ。ネパールは多民族国家だから、日本人より色の白いのもいれば、アフリカのコンゴ出身かなと思うようなのもいるんですよ。すると、近所の人がね、「あの、いつまでいるんですか?」「いつ出ていくんですか?」なんて言うから、なんのこつと言われてるんだろうと思って。いや、わたし、自分のことだと思って、「ずっといるつもりです」つて言ったらね、そうじゃなく、その色の黒いのがゴミ捨てに行ったりするもんだから。「あんた、なんも感じないんですか?」つて。「アルカイダのジャパンアジトだつて、みんな言ってますよ」つて。それで「悪いけど、出てくれ」つて、〔出て〕もらった。東京じゃそんなこと言われたことなかったのにな。

〔ここへ移ってきたのは〕72, 3〔のとき〕かな。だから、東京から通いながら、これ、カネがないなかで、〔自分で〕一生懸命建てたんだ。

〔平成13年に熊本地裁でハンセン病違憲国賠訴訟が勝ったときは、テレビで〕だいたい見てたね。人間でない扱いをされてきたんだから、まあ、よかったなって思ったけど。だけど、あの人たちは、そうして言えるけど、わたしがそんなことしたら、〔わたしが〕家を建てて喜んでもらったお客さんたち、どんな嫌な思いするだろうなど。わたしはとて、それだけの度胸はありません。身を捨ててこそ、だろうけど、わたしはやっぱり、厚かましい心はないから。だから、ハンセン病の話が、たまに、なんの拍子かなしに出ることがあるでしょ。わたしがそんなのだとは知らないから。そういうときは辛いよね。〔わたしは〕指も曲がってなくて〔外見的には後遺症がないように見えるけど〕やっぱり、悪い。〔手の知覚麻痺が〕ある、両方。だから、できるだけ、こうして握ったり〔のリハビリを〕してる。もう目も悪いから。真っ直ぐなのが曲がって見える。だからもう、運転も、ほんとはやっちゃいけないと思うんだけど。

〔まあ、眉毛も抜けなかったけど〕それでもね、不思議なもんでね、電車に乗ってて、やっぱり、お互いにわかんね。たまあに、そういうことがある。お互いに、やっぱり、目をそらすね。思い過ぎかもしれないけども。でも、わたしはそうだなと、わかるね。それだけ鋭くなつてんだね、感覚が。

〔裁判に勝ったあとのハンセン病補償法のこと、詳しくは〕わたしにはわかんない。〔全生園のソーシャルワーカーの方に〕お任せしたから。〔800万も

らいました。] 家内のときにずいぶんカネ要ったから、助かりましたよ。その残りでここを建てたんだ。自分でできることはなんでもやって。だから、満足なうちにはなっていない。[退所者給与金も] いただいています。

で、[2003年に] 熊本の〔黒川温泉のホテルがハンセン病療養所の入所者の宿泊拒否をして〕、あのホテル、あれ潰れましたね。やっぱり、新聞でそういうの載っていると、目がいっちゃう。[一方で] 本なんか見ると、「癩予防法」のできる以前に、ハンセン病の方の面倒をみたいいう、そういう〔外国の〕キリスト教の方もいらっしゃる。いまも、そこはあるそうですけども。戦争中には、ずいぶんご苦労なさったと、わたし思うよ。

わたしたちも、[ハンセン病療養所入所者の] 平均年齢が 83 歳とあって聞いてるんですね。もう、そのうちいなくなりますよ。[でも、東日本退所者の会の「あおばの会」の新年会に] 正月なんか行っても、みなさん、お元気ですね。わたしなんかもね、やっぱし、そういう方たちと交流さしていただけるだけで、ずいぶん救いになります。[あそこでは] かまえていない必要ないですから。わたし〔あの会への出席は〕 3 回ぐらいになる。

「棟梁」と呼ばれて

わたしが大工で職人として働いていたのは、木場の□□建設いうんですけど、そこには最盛期には 800 人ぐらい大工がいた。そのなかで、わたしは特殊な仕事を〔任されていた〕。大手の仕事取うつうのは、裏があって大変なんですよ。大きな仕事うつうのは、だいたい、みなどこも大手の銀行が入ってる。だから、そういうの、こんだ、どこで本社ビルを建てるよとか、こんだ、こういうのを建てるよいうと、自分とこだけでやることはできないけど、共同企業体にしてもメインになりたいわけだ。それでないと、利益が全然違う。そうすると、この仕事で、だいたい決定権持ってんのはこの重役だぞとか、銀行ではあれが権限強いとか、そういうところのサービス仕事をわたしなんか回されてたんだ。ああいうとこの偉いさんは、もう奥さんなんかに子どもを任せっきりで、そんなに家なんかにはいませんよ。せいぜい日曜日〔に自宅で〕朝飯食うのが精一杯で、そうするともう、ハイヤーが待ってる。日曜日だって朝飯食ったら、こんだゴルフでしょ。ゴルフだって、ただ楽しみで行ってたわけじゃない。仕事が、それで決まっていくうつうんだもの。——そうすると、奥さんが、台所を直したいわとか、子どもの部屋があれだとかって言うと、そういうところへわたしが回された。だから、わたしが行く現場は、「この仕事（あれ）は、いくらかかってもいいから、奥さんが喜んでもらうようにやれ」って。そうすると、[そういう仕事は表立って] うちの会社としてはできないから、「おまえの請け負いだよ」って。「カネはちゃんと、おれが責任をもって〔振り込まれるようにして〕やるから」って。そうすると、ほうぼう〔の大手建設会社〕からわたしとこ、口座へ振り込んでくれる。わたしは馬鹿だから、精一杯のことをやって、儲けはしなかったけど。それが取り柄だから。あとはもう、小学校も満足に出てないのが、「棟梁」「社長」ってゆってもらうのが、わたしとすりゃあ最高の勲章（あれ）だし。で、仕事をやるには、10 から 20 ぐらいの業者を使うわけです。ペンキ屋さん、屋根屋から〔なにから〕。仕事はわたしは厳しいけど、そのかわり、やってもらったひとには、きれいに払った。だから、わたしは手形は一度も切ったことはない。現金半分、小切手〔半分〕。小切手は、

かえって、現金より、場所によっては値打ちがあるわけだ。立派な銀行の小切手だから、「そんなところとしての業者のところの仕事をやってんだ」と、こう〔評価が〕あがっちゃう。

〔話は変わるけど、大工してきて、こんなんでいいのかなあと思ったこと、いろいろありますよ。〕だって、浦安。あすこ、海っかわ、〔パイルを〕打ち込んで、ほれで、海からホースでパアッとやって、途中を切って、海水だけ流れるようにして、なんの処理もしないで。あれ見てると、こんなとこ家を建てて大丈夫かなあって、わたしら思ったもの。そしたら、案定（あんじょう）、こんだ、〔東日本大震災で〕液状化でメチャクチャになっちゃった。そんなこと、わたしが思うぐらいだから、学者はわかんねえはずがないんだ。だから、金儲けしか考えてないんだ。あれやってるとき、わたし思ったもの。カネがすべてという考えは、やめてほしい。だって、わたしの関係する木場の5階建ての本社ビルが、あれ、50メートル打ち込んだよ、鋼管パイルを。それでもまだ地層まで届いてないつうんだもの。それはそうだろ。昔は海だもの。そんなところに何十階って建てて、あんな上のほうが頭でっかち。揺れたら倒れても、おれは不思議はないと思う。倒れないまでも、こんなンなったら生活できない。ピサの斜塔じゃあるまいし。

〔なにか趣味は持っているか、だって？〕なんにもない。そういう生活してこなかったから。ただ、大工仕事だけは、「親方」「棟梁」って言われるようになりたいって、それだけはいつも思ってきた。でも、大工は学者さんと違って、頭で考えて〔図面を〕描いて、じゃないから。大工は作らなくちゃダメだから。だから、まだまだ、百年現役もらっても、やっぱり、あの、五重の塔とか、数寄屋でもほんとの数寄屋とか、やってみないことには、勉強できない。

知られることの不安

わたしは、全生園（あそこ）へ入らないで、一般の入院（あれ）で行っただけ〔だけど〕、ずうっと、そのことはもう、心のなかに鉛を飲んだみたいな気持ちで〔いる〕。あの、10年前の話だけど、厚労省（こうせいしょう）から通知（あれ）をもらって、〇〇に住んでる人は〇〇県のここへ電話するようにって書いてあったから、電話したら、えらい嫌な思いした。さんざん待たして、最後に、「〇〇県はハンセン病にはいっさい関係ありませんから。管轄は厚労省です」って。

ましてや、ここだって、隣でもあれでも〔わたしが家を〕建てて喜んでもらったのが、あんた、病気だなんてわかったら、どんなンなるか。それ思ったら、もう、とてもじゃないが……。わたし、会えば、「こんにちは」「おはようございます」。それだけで、話ししない。わかったらと思ったら、なんか、ゾッとするから。わたしはまだ、こんなとこでも、自分の土地だから、まあ、他人様（ひとさん）に迷惑かけない以上は気楽におれますから、できれば、ここで死にたいだけど。いろいろ考えたら、やっぱり、〔民間の施設に〕入所（あれ）すれば、結局は病気のことわかるから。全生園へ、最後はお世話になるのがいちばんいいかなあと思ってるけど。もう、あんまり長生きしないで、ポックリ逝ってくれれば、それがいちばん幸せよ。なかなか、そうはいかないよ。

ただ、わたしもね、だんだん、物忘れもひどいし、2ヵ月おきに〔現況届を〕書いて〔厚労省に〕出さなきゃなんないでしょ。だから、あれも忘れそうにな

るから。そういうの、ちゃんと〔「ハート相談センター」の人に〕お願い〔しておきたい〕。はたしてやったかな、どうしたかなって、落ち着かなくなっちゃう。

〔いまはまだ、食事は自分で作っているか、だって?〕いや、〔一日〕2食、配達してもらってる。もうね、ビール一杯飲んできると、飯要らなくなっちゃう。弁当とれば、もったいないと思って食べるけど。

いずれまあ、あれしたら、介護のほう受けなきゃなんないでしょ。そうなったら、嫌でもバレちゃいますよ。老人ホーム入るにしても、よしんば、在宅(ここ)で介護を受けるにしても、絶対バレる。そのときを考えると、ゾッとする。わたしのそんなのがわかったら、ずいぶん嫌な思いしなきゃなんないと思うから。けっきょく、ほら、月々の退所者給与金(あれ)もいただいでしょ。それとか、やっぱり、そういう関係で、こういうふうに来ていただいたり。〔それを見たら〕人間の勘ですぐわかりますよ。

自分でこうしてできるあいだは、やっぱり、ここが、いちばん、わたし、いいんですよ。〔しかし、ひとに頼らざるをえなくなった瞬間に、秘密は守れない。〕からだは悪いわね、こころのなかでも辛い思いをするのは耐えられないな、と。まあ、あすこ、全生園へ世話になれば、まわりみんなそうだから。いままでいちばん、何十年って悩んでいたことが、いちおう解消するわけだから。でも、あすこも様変わりしてきましたね、全生園も。次々と、立派なものを建てて。

やっぱりね、病気のことであんまり苦しみたくないから。——全生園の近くあたりじゃ、ずいぶん、いまね、〔人びとの意識が〕全然むかしとは違うけど。やっぱり、このへんは〔昔のままの意識が残ってる〕。できれば、ここで一生を終わらしたいけどね。〔飼い犬のこともあるしね。〕

実家には病気のことは知らせてない

おやじは、55かな、ガンで亡くなった。京大の付属病院で。そのときは、〔わたしは〕すでに東京にいました。見舞いにも行きましたし、〔葬式にも〕参列(あれ)しましたけど。ただ、実家は、わたしの病気のことはいっさい知りません。それで、わたし、ここ来てから5年ぐらいのときに、長姉(ちょうじょ)に「じつは、おれ、ハンセン病だったんだ」ついたら、かわいそうだなっていうよりも、もう、姉の態度が変わっちゃったもん。そのときに、「実家へは絶対言うなよ」って。「〔言ったら〕先祖の墓参りも、おそらくできないよ」って言われた。

けっきょくね、わたしが〔この〕病気だいうのを知らないときは、電話しても、ああだこうだって、きょうだいで、話があった。いま、〔長姉は〕神戸に住んでんだけど、〔わたしがハンセンの〕病気だっていうことになると、やっぱり、その子どもも孫も知らないわけですよ。そういうの、知られたくないっていうのがホンネじゃないかなあって、わたしは思うんだ。

まあ、そう言っちゃ悪いけど、療養所(あそこ)で生活なさった方は、開き直ってるというか、もう、怖いもんじゃないですよ。でも、わたしは誰も〔わたしが〕その病気だなんて知らないんだから……。

〔わたしの病気のことは〕実家は知りません。だから、おふくろが病気とか、なんか用事があるときは帰ってました。まあ、親のいるあいだは、冬は雪が降

りますから〔そのときは避けて〕、お盆にはかならず帰ってました。

〔わたしは5人きょうだいで〕全員まだ生きてる。わたしとこじゃ、いちばん長く生きたくて73だけど。やっぱり、いま、それだけ寿命が長くなったんですかね。

悔恨——子どもを産んではいけないと思い込んでいた

〔家内とのあいだに子どもはつくらなかったのか、だって?〕いや、知らないから、絶対ダメって思って、随(お)ろしちゃった。泣き泣き。なんかあの、ハンセン病の療養所(あそこ)へ行くと、〔随胎児の〕アルコール浸けにしたのがゴロゴロあるとか、そういうのを聞いてたから。だから、つくれなかった。それで、このあいだはじめて聞いたんだけど、奥さんがハンセン病でない人は産んでもよかったんだなんて、はじめて聞いた。もう、わたしたちは、テンから、ハンセン病は子どもを持ちちゃいけないんだって、思った。

子どもができてたら、わたしの人生も、また違ったかたちになってたでしょう。籍も入れてたかもしれない。

〔東大の先生に相談しなかったのか、だって?〕そんなことできませんよ。〔東大の先生の〕父親(おじいさん)が近衛師団の師団長だったんだから。〔一言聞けばよかったのって言うけど〕もう、テンから、そういうふうに思い込んでた。

ここはね、通学路でしょ。そして、前が、ほら、これ賃貸〔マンション〕なんです。若い奥さんが多いから、子どもさん多いの。だから、学校からも頼まれてね、「もし、なんかあったら、ここへ逃げなさい」って〔玄関のところにそういうマークを〕付けてるんですよ。

Like a Non-Internee, or Somewhat Like That: Life Story of a Hansen's Disease Ex-patient

Yasunori FUKUOKA & Yui KIKUCHI

We met Mr. A who was recovered from Hansen's disease at the New Year meeting of *Aoba no Kai* (Kanto Area Association of the Released from Hansen's Disease Facility) in January 12, 2015 for the first time. At that time, we had a brief talk and he told us that he recently tried to enter Tama-Zenshōen, Hansen's disease sanatorium in Tokyo with his dog but was told that he couldn't have a dog in the facility.

We visited his home and had an interview in February 16, 2015. Interviewers were Yasunori Fukuoka and Yui Kikuchi. Ms. Toshiko Naito who came from Heart Counseling Center seated in the interview. While interviewing, his dog, a dachshund, which caused the trouble between him and the facility played around us.

Mr. A's first word at the interview was, "Actually I had never entered

Zenshōen. I was only hospitalized there. I said to a doctor of the University of Tokyo Hospital, 'I'll kill myself if you send me to that kind of Hansen's disease facility.' Then, the doctor told me, 'Currently good medicine of the disease is released and you don't need to enter the facility if you regularly have medicine on time.' Thus I used to be hospitalized in Zenshōen only when my health condition was really down." He also added that he did not have a room in the facility dormitory because he was released from the facility as soon as he got recovered and attended the University of Tokyo Hospital to continue to take care of his symptoms.

Mr. A's birth date on his family registration record is in January, 1934. He was 81 years old at the moment of the interview. He was born to a poor family living in a mountain village in the north side of Kyoto Prefecture. He became apprentice of a carpenter when he was 13 years old. He got the Hansen's disease symptom when he was 22 years old as working as a carpenter in Tokyo. At the beginning, he got diagnose at a neighbor clinic but 2 months later was sent to the University of Tokyo Hospital. Then he began to regularly attend the hospital to take care of the symptom from 1956. And now, he is receiving the allowance from the Ministry of Health, Labor and Welfare for those who are released from Hansen's disease facility.

Mr. A's experience of "Like a Non-Internee, or Somewhat Like That" is a contrast from the story of Mr. Masahiko Inaba (his alias in the Hansen's disease facility), "I Could Not Work Because the Doctor Told Me that I Need to Attend the Hospital Every Second Day for Medicines" (Vol. 12 of this journal).

Mr. Inaba was born in 1934, the same age of Mr. A. Mr. Inaba was sent to Kikuchi-Keifūen, Hansen's disease Sanatorium in Kumamoto in 1965 even 9 years later than Mr. A's experience. Mr. Inaba was told that he had to attend the hospital for medicines every second day by Osaka University Hospital. Consequently, he lost his job and got divorced. Then, he was sent to the facility to live there in his life time. However, 9 years earlier, the University of Tokyo Hospital told Mr. A that he only needed to attend the hospital once in a week to receive medicines. Thus he could keep his job as a carpenter and the relationship with his common-law wife.

Mr. A's case fully reveals the irrationalities of the Segregation Policy.

I once judged that the doctor's decision at Osaka University Hospital was somewhat inevitable due to the restrictions of the times when I first heard Mr. Inaba's story. However, after I compared Mr. Inaba's case with Mr. A's, I realized that my judgment on the decision of the doctor

in Osaka University Hospital would be wrong because there was the doctor who let Mr. A keep his job while attending the hospital even 9 years earlier.

Mr. A was lucky. However, Mr. A could not avoid the wave of Segregation Policy and the Movement of Hansen's Disease Free Prefecture. That is to say, he was not fully free from the spider web of the discrimination on Hansen's disease. He had to ask his common-law wife to have abortion because he believed that Hansen's disease was hereditary. Even more he is deeply scared of the possibility that his neighbor would be aware of Mr. A's Hansen's disease history when he could not take care of himself for his age.

Keywords: Hansen's disease, outpatient treatment, life story